

Seiberg - Witten 理論が教えてくれること。

お茶の水女子大学・理学部 小野 薫

§0. 序

昨年の暮、4次元トポロジーに重要なゲージ理論に新展開があった。それ以来、日本国内でも、何人かの人達が、各地で紹介されたので、既に概要と御存知の方も多いかと思う。私自身は、ゲージ理論の専門家ではないが、今回身近な所で Seiberg - Witten 理論の威力を目のあたりにした。また、この話では、Dirac 作用素が、(表に現れる)登場人物である。個人的には、Dirac 作用素というものの周辺に関心を持っていたので、今後多くの方が、Dirac 作用素周辺にも関心を持ってくれるかもしれないという期待もある。

この紹介文では、Seiberg - Witten 理論の粗筋と応用例について述べるが、筆者の力量不足の為、Seiberg, Witten による物理的推論については全く触れる事ができない。お許し戴きたい。

§1. Spin geometry

この節では、向き付けられた多様体上の spin^(c) 構造, Dirac 作用素について述べる。多様体が与えられた時、向きが付けられるかどうかと第1の間とすると、その次のステップが、spin であるかどうかという間となる。言い換えると、「向きが付く」という事は、「閉曲線上に接束を制限したとき自明束となる」事だが、「spin である」とは、「実2次元サイクルに、接束を制限したとき、安定自明束となる」事といえる。(ここで安定自明とは、いくつか自明束を直和すると、自明束となること。)

特殊直交群 $SO(m)$ の二重被覆群を $Spin(m)$ と書く。(これは $m \geq 3$ のとき単連結となる。) m 次元有向多様体 M の接束 TM の変換関数

$$g_{ij} : U_i \cap U_j \rightarrow SO(m)$$

が、 $\text{Spin}(m)$ -値変換関数(1-コサイクル)に持ち上がるとき、その持ち上げ方を spin 構造という、

$$0 \rightarrow \mathbb{Z}_2 \rightarrow \text{Spin}(m) \rightarrow \text{SO}(m) \rightarrow 1$$

に対応して、

$$(*) \quad \rightarrow H^1(M, C^\infty(\cdot, \text{Spin}(m))) \rightarrow H^1(M, C^\infty(\cdot, \text{SO}(m))) \xrightarrow{\cong} H^2(M, \mathbb{Z}_2)$$

なる完全系列ができる。接束は、 $H^1(M, C^\infty(\cdot, \text{SO}(m)))$ の元に対応している。それら $H^1(M, C^\infty(\cdot, \text{Spin}(m)))$ の元に持ち上がる事は、連結準同型 \mathcal{S} による像(これは第2 Stiefel-Whitney 類と呼ばれ、 w_2 と書かれる)が0となる事と同値となる。同伴する主束の言葉で言うと、 spin 構造とは、接束 P_{SO} の fibrewise double cover である主 $\text{Spin}(m)$ -束を取る事と解釈される。

$$(**) \quad \begin{array}{ccc} \text{Spin}(m) & \rightarrow & P_{\text{Spin}} \\ \downarrow & & \downarrow \\ \text{SO}(m) & \rightarrow & P_{\text{SO}} \\ & & \downarrow \\ & & M \end{array}$$

M 上にどの位 Spin 構造があるかは、上の様「もの」の分類を判り、 $H^1(M; \mathbb{Z}_2)$ が、 $\{M \text{ 上 の } \text{spin 構造}\}$ に simply transitive に作用している事が判る。(上の完全系列(*)に現れる $H^1(M, C^\infty(\cdot, \text{Spin}(m)))$ は単に、主 $\text{Spin}(m)$ -束を分類しているものであり、(**) にある fibrewise double cover という情報が入っているからである。この事実は(*)から得られたものである事を注意しておく。)

$\text{Spin}(m)$ は $\text{SO}(m)$ の \mathbb{Z}_2 -拡大である。次に S^1 -拡大 $\text{Spin}^c(m)$ を導入する。これを考える理由として、後にはみるように、概複素構造があれば、(spin 構造が入るとは限らないが) spin^c -構造が入る事が考げられる。 $\text{Spin}^c(m)$ は、 $\text{Spin}(m) \times S^1$ に ± 1 の対角作用で割ったものである。

$$(***) \quad 0 \rightarrow S^1 \rightarrow \text{Spin}^c(m) \rightarrow \text{SO}(m) \rightarrow 1$$

$$(***) \quad 0 \rightarrow \text{Spin}(m) \rightarrow \text{Spin}^c(m) \xrightarrow{\cong} S^1 \rightarrow 1$$

$$[A, \pm] \mapsto \frac{A}{\pm}$$

なる2つの完全系列がある。 spin^c 構造は、上の spin 構造の説明と

#) M 上に1つは spin 構造があるとは仮定している。

同様に、変換関数の $Spin^c(m)$ の持ち上げと思ってもよい。主束の言葉で、 P_{SO} の fibrewise S^1 -束 P_{Spin^c} (10.8 主 $Spin^c(m)$ 束)

$$\begin{array}{ccc} Spin^c(m) & \rightarrow & P_{Spin^c} \\ \downarrow & & \downarrow \\ SO(m) & \rightarrow & P_{SO} \\ & & \downarrow \\ & & M \end{array}$$

の事としてもよい。また、 $H^2(M, C^\infty(\cdot, S^1)) \cong H^3(M; \mathbb{Z})$ に注意すると、 $Spin^c$ 構造の存在の障害は、 $H^3(M; \mathbb{Z})$ の元で与えられるが、実はこれは、前出の w_2 の Bockstein 準同型 ($0 \rightarrow \mathbb{Z} \xrightarrow{\cdot 2} \mathbb{Z} \rightarrow \mathbb{Z}_2 \rightarrow 0$ による)

$$H^2(M; \mathbb{Z}) \rightarrow H^2(M; \mathbb{Z}_2) \xrightarrow{\beta} H^3(M; \mathbb{Z})$$

での w_2 の像で、従って、 $Spin^c$ 構造が存在する為の必要十分条件は、 w_2 が $H^2(M; \mathbb{Z}) \rightarrow H^2(M; \mathbb{Z}_2)$ の像に含まれる事となる。詳細は省略するが、この事実と、Wu の公式、普遍係数定理と合わせると、4次元有向多様体は、 $Spin^c$ 構造を持つ事が判る。

さて、どれ位 $Spin^c$ -構造があるか^{*)} というと、前と同様に、 $H^2(M; \mathbb{Z})$ が $\{M$ 上の $Spin^c$ -構造} に simply transitive に作用する。

M が概複素構造を持つとしよう。接束の構造群は $U(m)$ としよ。 $U(m) \hookrightarrow SO(m=2n)$ による $Spin(m)$ の引き戻し $E, \tilde{U}(m)$ と書く。

$$\begin{array}{ccc} \tilde{U}(m) & \xrightarrow{\tilde{\iota}} & Spin(m) \\ \pi \downarrow & & \downarrow \\ U(m) & \xrightarrow{\iota} & SO(m) \end{array} \quad \begin{array}{ccc} \tilde{U}(m) & \xrightarrow{\tilde{\iota} \times \sqrt{\det} \cdot \pi} & Spin(m) \times S^1 \\ \pi \downarrow & & \downarrow \\ U(m) & \hookrightarrow & SO(m) \end{array}$$

右上回の $\tilde{\iota} \times \sqrt{\det} \cdot \pi$ は、 $U(m) \rightarrow Spin^c(m)$ と定める。

(ここで $\det: U(m) \rightarrow S^1$ は、基本群の同型を導くので、 $\tilde{U}(m)$ 上、 \det の平方根がとれる事を用いた。) 従って、接 $U(m)$ 束束に上の準同型で、同伴 $Spin^c(m)$ -束を作ると、これが $Spin^c$ -構造となる。以後概複素多様体に対しては、これを標準的 " $Spin^c$ -構造" と呼ぶ。(蛇足であるが、概複素多様体が $Spin$ 構造を持つとしても、一般には、"標準的" $Spin^c$ -構造と整合していない。 " $\sqrt{K_M^*}$ " のずれがある。)

*) M 上には $Spin^c$ 構造があるとは限らない。

Dirac 作用素を考えるには、主 $Spin^c$ -束に接続をいれたいとい
 けたい。 M に Riemann 計量が定まると、 P_{SO} 上には Levi-Civita 接続
 が定まる。 $spin$ 構造の場合は、 P_{Spin} は P_{SO} の double cover での
 接続型式の引き戻しで、 P_{Spin} に接続が定まるが、 $spin^c$ 構造の場合は
 P_{Spin^c} は P_{SO} 上の S^1 -束なので、この“1次元分”の不定性が残る。こ
 れを定める為に、 $spin^c$ 構造に同伴する S^1 -束 $L = P_{Spin^c} \times_{S^1}$
 (これは完全系列(****)に現れたもの)の接続を1つ定める。そして、それを
 $P_{Spin^c} \rightarrow L$ により引き戻す。こうして残った“1次元分”が決まる。
 つまり、この場合、 M 上の Riemann 計量のみでなく、 L 上の接続を
 選ぶ必要がある。(後では、 L 上の接続が、“未知関数”の1つとして
 現れる)

$Spin^c(m)$ は、 \mathbb{R}^m から作られる Clifford 代数の複素化 $Cl^c(\mathbb{R}^m)$
 に含まれ、従って $Cl^c(\mathbb{R}^m)$ の表現から $Spin^c(m)$ の表現が得られる。
 特に $m = 2n$ (偶数) の時、 $Cl^c(\mathbb{R}^m) \cong M_{2^n}(\mathbb{C})$ の既約表現の、

$Spin^c(m)$ の制限は、 (ρ^\pm, Δ^\pm) と2つの表現に分解する。これらの表
 現を用いて、 P_{Spin^c} に同伴したベクトル束 $S^\pm = P_{Spin^c} \times_{\rho^\pm} \Delta^\pm$ が
 構成される。例えば、(概)複素多様体の“標準的” $spin^c$ 構造から S^\pm を作
 ると、 $S_{can}^+ \cong \wedge^{0, even} T^*M$, $S_{can}^- \cong \wedge^{0, odd} T^*M$ となる。

Dirac 作用素とは、上で Kähler の場合、Dolbeault 作用素 $\bar{\partial}$ の言葉
 でいうと、 $\bar{\partial} + \bar{\partial}^*$ に当るもので、正確な定義は以下の通り。

この頁の上には書いた処方で、 P_{Spin^c} に接続をいれ、これによる
 共変微分を $\nabla: \Gamma(S^\pm) \rightarrow \Gamma(T^*M \otimes S^\pm)$ と書く。更に、
 Riemann 計量を用い、 T^*M と TM を同一視し、Clifford 積
 $TM \otimes S^\pm \rightarrow S^\mp$ を考える。($\Delta^+ \otimes \Delta^-$ は $Cl^c(\mathbb{R}^m)$ の表現にあたり、
 これらの合成として、

$$D^\pm: \Gamma(S^\pm) \xrightarrow{\nabla} \Gamma(T^*M \otimes S^\pm) \cong \Gamma(TM \otimes S^\pm) \rightarrow \Gamma(S^\mp)$$

を得る。これを Dirac 作用素という。 D^\pm は楕円型/楕円型微
 分作用素で、 D^\pm は互いに他の随伴作用素である。この作用素の重
 要性は、幾何構造に付随した楕円型微分作用素の親玉であるという
 事に理由があると思われる。Atiyah-Singer の指数定理により、幾何的

情報と位相的情報とが結びついてゐる事に依る。(60~70年代は、こうした線型の話があったが、今のゲージ理論に代表される流氷は、その非線型版といえる。) 代表的応用例をいくつか挙げる。

i) 正の scalar 曲率を持つ計量への障害 (Lichnerowicz)

compact spin 多様体が正の scalar 曲率をもつ計量を許せば、 \hat{A} -種数は消える。(指数定理により、spin Dirac作用素 D^+ の指数 = \hat{A} -種数)

ii) 非自明な S^1 -作用への障害 (Atiyah-Hirzebruch)

compact spin 多様体が自明でない S^1 作用を許せば、 \hat{A} 種数は消える。

iii) Rochlin の定理の別証 (Atiyah-Hirzebruch)

[Rochlin: 4次元 compact spin 多様体の signature は 16 で割り切れる]

このうち ii) は、同変 K 理論の局所化定理に依るもので、以前 Witten が発見した elliptic genus の話は、ii) の拡張といえ、その中で (少し前は Ochanine により) iii) の $8k+4$ 次元への一般化がなされてゐる。iii) は D^+ の複素線型のみならず四元数体上線型で、後、2 指数が偶数となる事に依る。この考え方の現代版が、今回の Seiberg-Witten 理論での古田幹雄氏の見事な仕事といえる。[F] i) は Bochner-Weitzenböck の公式と呼ばれるものにより示されるが、この(種)の公式が Seiberg-Witten の moduli 空間の compact 性を保障してゐる。

< Spin Dirac 作用素の Bochner-Weitzenböck の公式 >

$$D^*D = \nabla^*\nabla + \frac{Sc}{4}$$

ここで、 D^* , ∇^* は D , ∇ の随伴作用素、 Sc は scalar 曲率を表す。これを認めると、 Sc が正のとき、 $\ker D = 0$ が、次の様に判る。 $\Delta \in \ker D$ とする。

$$\begin{aligned} 0 &= \langle D^*D\Delta, \Delta \rangle = \langle \nabla^*\nabla\Delta, \Delta \rangle + \langle \frac{Sc}{4}\Delta, \Delta \rangle \\ &= \underbrace{\|\nabla\Delta\|^2}_0 + \underbrace{\langle \frac{Sc}{4}\Delta, \Delta \rangle}_0 \end{aligned}$$

よって、 $\Delta = 0$ 。即ち $\ker D^+ = 0$ 。 $\ker D^+ \cong \ker D^- = 0$ 。□

(後には、各点ノルムによる議論を紹介する)

以上で前置きを終え、本論に入る。

§ 2. Seiberg-Witten の方程式とその解空間

M を 4次元閉有向多様体とする。(閉 = compact without boundary)
 M 上の Riemann 計量 g と、 $spin^c$ 構造 \mathcal{L} とを取っておく。(§1 で触れた様に、 $spin^c$ 構造の存在は判っている。また、文献によれば、 \mathcal{L} はよく、その同伴 S^1 束 (の Euler 類) のみを記している事もあるが、こちらの方が正確である。) \mathcal{L} が決まると、同伴 S^1 束 L が定まる。(§1) のとき、Seiberg-Witten 方程式とは、 $\phi \in \Gamma(S^+)$, $A \in \mathcal{A}(L) = \{L \text{ 上の接続全体} \}$ に对する次のものである。

$$(SW) \quad \begin{cases} D_A \phi = 0 \\ F_A^+ = \sigma(\phi, \phi) \end{cases}$$

ここで、 D_A は、Riemann 計量 g の Levi-Civita 接続と、 A から決まる Dirac 作用素、 F_A^+ は、 L 上の接続 A の自己双対成分 (即、 g に関する Hodge $*$ -作用素に関し、 $\Lambda^2 T^*M$ と ± 1 固有空間 Λ_{\pm}^2 に直和分解した時の Λ_+^2 成分) をして、 $\sigma(\phi, \phi)$ は以下で定まる“ ϕ に関する 2 次の項”。

Clifford 積により、 $\Lambda^2 T^*M (\cong \Lambda^2 TM) \rightarrow \text{End}(S^+)$ が得られるが、 Λ_-^2 は、この kernel となり、更に image を調べる事で、 Λ_+^2 は、 $\{S^+$ の traceless skew Hermitian endomorphisms $\}$ と同型となることが判る。従って、 $\sqrt{-1} \Lambda_+^2 \xrightarrow{\sim} \{S^+$ の traceless Hermitian endomorphism $\}$ となる。ここで、 $\psi \in S^+ \mapsto \langle \psi, \phi \rangle \phi \in S^+$ なる endomorphism の traceless part をみると、 $\psi \mapsto \langle \psi, \phi \rangle \phi - \frac{1}{2} \langle \phi, \phi \rangle \psi$ となるが、これに対応する $\sqrt{-1} \Lambda_+^2$ の元を $\sigma(\phi, \phi)$ と書いた。実は σ は “moment map” として解釈されるが、ここでは省略する。

方程式 (SW) は、計量 g に依存しているが、更に次の摂動も考えよう。 g に関する自己双対 2 型式 μ を取り、(μ は純虚係数とする)

$$(SW)_{\mu} \quad \begin{cases} D_A \phi = 0 \\ F_A^+ = \sigma(\phi, \phi) + \mu \end{cases}$$

この方程式を (摂動された) Seiberg-Witten 方程式と呼ぶ。以下で、この有用性もお判り戴けると思う。方程式 (SW) 或いは $(SW)_{\mu}$ には、“無限次元の対称性”があるため、解空間をこの作用で割って考

える。 $\mathcal{G} = C^\infty(M, S^1)$ は、 $\Gamma(S^1) \times \mathcal{A}(L)$ に次の様に作用する。
 $f \in \mathcal{G}; (\phi, A) \in \Gamma(S^1) \times \mathcal{A}(L) \longmapsto (f \cdot \phi, (f^2)^* A) \in \Gamma(S^1) \times \mathcal{A}(L)$
 ことに $g^* A$ とは、 $g \in \mathcal{G}$ を L のゲージ変換と思、接続 A を
 g で引き戻したものである。容易に判る様に、この作用は、(SW)
 或いは (SW) $_\mu$ の解空間を保つ。そこで、"moduli 空間" と

$$\mathcal{M}(\mathcal{L}, \mathcal{G}) = \{ (SW) \text{ の解} \} / \mathcal{G}$$

$$\mathcal{M}(\mathcal{L}, \mathcal{G}, \mu) = \{ (SW)_\mu \text{ の解} \} / \mathcal{G}$$

を定める。

また M の 1 点 p を選んで、 $\mathcal{G}_0 = \{ f: M \rightarrow S^1 \mid f(p) = 1 \}$ とおく。

$$\tilde{\mathcal{M}}(\mathcal{L}, \mathcal{G}) = \{ (SW) \text{ の解} \} / \mathcal{G}_0$$

$$\tilde{\mathcal{M}}(\mathcal{L}, \mathcal{G}, \mu) = \{ (SW)_\mu \text{ の解} \} / \mathcal{G}_0$$

とおく。 $\mathcal{G}/\mathcal{G}_0 \cong S^1$ であり、 $\tilde{\mathcal{M}} \rightarrow \mathcal{M}$ は、 $\{(\phi, A) \mid \phi = 0\}$
 以外では、 S^1 -束となる。 $\phi = 0$ とする解 $(0, A)$ は、可約解と呼
 ぶ事にする。可約解 $(0, A)$ を考えたと、(SW) では、 $F_A^+ = 0$ (即ち、
 A は反自己双対接続)、(SW) $_\mu$ では、 $F_A^+ = \mu$ を得る。Chern-Weil
 理論に依れば、 $\frac{1}{2\pi\sqrt{t}} F_A$ は、 L の第 1 Chern 類 $c_1(L)$ を表し、従って、
 $H^2(M; \mathbb{Z}) \rightarrow H^2(M; \mathbb{R})$ の像 ($H^2(M; \mathbb{Z})_{\mathbb{R}}$ と書く) に入る。例えば、(SW)
 の時、 $H^2(M; \mathbb{R})$ を \mathcal{G} に関する調和 2 型式の空間と同一視すると、
 反自己双対調和 2 型式の空間 \mathcal{H}_+^2 は $H^2(M; \mathbb{R})$ の線型部分空間で、余
 次元は $b_2^+ = \dim \mathcal{H}_+^2$ ($\mathcal{H}_+^2 = \{ \text{自己双対調和 2 型式} \}$) である。 $b_2^+ \geq 1$
 の時は、 \mathcal{G} を一般の位置にあるとすれば、 $H^2(M; \mathbb{Z})_{\mathbb{R}} \cap \mathcal{H}_+^2 = \{0\}$
 としよ。従って、 $c_1(L)_{\mathbb{R}} \neq 0$ の時、可約解は存在しないことになる。
 (但、 $b_2^+ = 1$ の時は後の wall-crossing の問題と関り、後で
 注意が必要。)

$b_2^+ \geq 1$ の時、 \mathcal{G} を一般の位置にとると、 $\tilde{\mathcal{M}}(\mathcal{L}, \mathcal{G}, \mu) \rightarrow \mathcal{M}(\mathcal{L}, \mathcal{G}, \mu)$
 は、 S^1 -束となる。この Euler 類を e と書く。 \mathcal{M} が有限次元
 有向関多様体であれば、 e の中を \mathcal{M} の基本類を測る事に数を得る。
 これを、Seiberg-Witten 不変量と呼ぶ場合もあるが大雑把に定義である。
 何故この様な数と考えるのかは、少し別の角度(とくに μ は L と変化する)か
 からの次の説明を与えるのがよいかもしれない。

今の場合、 M は、 $\{(\Gamma(S^+), \{0\}) \times \mathcal{A}(L)\} / G$ のサイクルと見ることができ、 $\{(\Gamma(S^+), \{0\}) \times \mathcal{A}(L)\} / G$ の 然るべき次数のコホモロジー類の evaluation ができる。この大きな空間は、 G の分類空間で、そのホモトピー型は、 $\mathbb{C}P^m \times T^{b_1(M)}$ である事が判る。($T^{b_1(M)}$ は $b_1(M)$ 次元のトーラス)。前出の e は、 $\mathbb{C}P^m$ の 2次元コホモロジーの生成元に他ならぬ。

以上の事を実行するには、 M が有限次元関多様体となる事をみないといけない。有限次元多様体である事は、(SW) 或いは (SW) $_{\mu}$ が、非線型楕円型方程式であれば、(Banach 空間の) 陰関数の定理と、(Fredholm 写像についての) Sard の補題を用いて、一般の位置にある (g, μ) に対し、解空間が有限次元多様体となる事が判る。今の場合、少しの修正でこの議論ができる。修正が必要なのは、(SW), (SW) $_{\mu}$ が G という無限次元の群の対称性があるからで、それは所謂ゲージ固定をすればよい。このとき、接空間は、線型化方程式の解空間となるが、この次元は、(線型化作用素が全射であることにより) 線型化作用素の指数として計算できる。指数は、楕円型作用素の主表象にのみ依るが、これは今の場合、Dirac 作用素 $D^+ : \Gamma(S^+) \rightarrow \Gamma(S^-)$ と、 $\Omega^1 \xrightarrow{d^* \oplus d^+} \Omega^0 \oplus \Omega^2_+$ を並べたものの主表象と同じとなるので、このことから

$$d_2 = \dim M = \frac{1}{4} (c_1(L)^2 - 2 \text{Euler}(M) - 3 \text{Signature}(M))$$
 とする事が判る。

向きについては、 M の接束が、 M のパラメータづけられた線型化作用素の族の指数 (これは一般には形式的ベクトル束の差として $KO(M)$ の元であるが今は、全射である線型化作用素の族の指数を考えている) として解釈できる。 D^+ は複素線型なので、こちらの kernel cokernel には自然な向きが入る。そこで片われの $\Omega^1 \xrightarrow{d^* \oplus d^+} \Omega^0 \oplus \Omega^2_+$ の指数で、1つ向きを決めてあげると、族の指数に向きがつけられる。即ち、 $H^1(M; \mathbb{R}) \oplus (H^0(M; \mathbb{R}) \oplus H^2_+(M; \mathbb{R}))^*$ の向きを与えることで M に向きが定まる。以下1つ向きが選ばれているとして話を進める。

次に compact 性を示すアイデアを説明する。鍵となるのは、§1 の最後に触れた Bochner-Weitzenböck の公式であるが、ここには、spin^c Dirac 作用素なので、1つ項がつけ加わる。

< spin^c Dirac作用素の Bochner-Weitzenböck の公式 >

$$D_A^* D_A \phi = \nabla_A^* \nabla_A \phi + \frac{S_c}{4} \phi + \frac{1}{2} F_A \phi$$

前にも述べた様に、反自己双対2型式は、Clifford積により S^+ に作用させると、0となるので、右辺第3項を $F_A = F_A^+ + F_A^-$ と分解すると、

$$\phi \in S^+ \longmapsto F_A^- \cdot \phi = 0 \in S^+$$

となり、 $\phi \in S^+$ とすると、 $F_A \phi = F_A^+ \cdot \phi$ である。

(ϕ, A) を (SW) の解とする。

$$\begin{aligned} \frac{1}{2} \Delta |\phi|^2 &= \langle \nabla_A^* \nabla_A \phi, \phi \rangle - |\nabla_A \phi|^2 \\ &= \langle \underbrace{D_A^* D_A \phi}_0, \phi \rangle - \frac{S_c}{4} |\phi|^2 - \frac{1}{2} \underbrace{\langle \sigma(\phi, \phi) \phi, \phi \rangle}_{\parallel F_A^+ \phi} - |\nabla_A \phi|^2 \\ &\leq -\frac{1}{4} (S_c + |\phi|^2) |\phi|^2 \end{aligned}$$

$|\phi|^2$ が最大値をとる点では、 $\Delta |\phi|^2 \geq 0$ であり、その点では $S_c + |\phi|^2 \leq 0$ となる。従って、 $|\phi|$ は Scalar 曲率により定まる定数による C^0 -bound をもつ。このことから F_A^+ も C^0 -bound をもつ。また、 $F_A = F_A^+ + F_A^-$ の de Rham 類は L のみで決まることを念へると、 F_A の L^2 -norm が押えられる。以後この L^2 -bound を方程式 (SW) に盛り込むことで、より“高次”の bound が得られる。Rellich の補題と併せて compact 性が得られる。

今の議論から判る事を書いておく。まず Scalar 曲率が正であるとする。解 (ϕ, A) は可約解しかあり得ない。従って、 $b_2^+ \geq 1$ である時、一般の位置にある (g, μ) に対し、 $(SW)_\mu$ は解をもたない事が判る。(消滅定理) また、 (SW) が解をもつ様な spin^c 構造は、高々有限個である事も同様の議論を基にして示される。

以上で、Seiberg-Witten 不変量を定義する準備が整った。 M は $b_2^+ \geq 1$ (但し $b_2^+ = 1$ の時は後述の様に余分の注意あり) とし、 $H^1(M) \oplus (H^2(M) \oplus H_+^2(M))^*$ に向きを与えておく。 \mathcal{L} を M 上の spin^c 構造とし、この \mathcal{L} に対し、 $(SW)_\mu$ を考える。 (g, μ) は一般の位置

にあるものとすると、 $m(g, \mu)$ は、 d_g 次元有向閉多様体となり、 $\tilde{m}(g, \mu) \rightarrow m(g, \mu)$ は、 S^1 -束となる。この Euler 類を e とする。特に、 $d_g < 0$ のときは、 $m(g, \mu) = \emptyset$ 、 $d_g = 0$ のときは、有限個の点に \pm の符号がつけられるものとなる。そして、 $d_g < 0$ 又は d_g が奇数のときは、 $SW(L; g, \mu) = 0$ と定義し、 $d_g = 0$ の時は、 $SW(L; g, \mu) = m(g, \mu)$ の点に符号をつき \mathbb{Z} -数に取替、 d_g が正の偶数の時は $SW(L; g, \mu) = \langle e^{d_g/2}, [m(g, \mu)] \rangle$ として、 $SW(L; g, \mu)$ を定義する。次に考えるのは、 $SW(L; g, \mu)$ が (g, μ) に依存するかどうかという問題である。

その為には、 $(g_1, \mu_1), (g_2, \mu_2)$ を一般の位置にある $2 \rightarrow 2$ 対とし、これら (g_t, μ_t) ($1 \leq t \leq 2$) とする。

$$M = \bigcup_{1 \leq t \leq 2} \{t\} \times m(g_t, \mu_t)$$

なる集合を考える。もしこれが、compact 有向多様体である事が判れば、その境界として $t=1, 2$ のときの $m(g_1, \mu_1), m(g_2, \mu_2)$ が現れ、この事から $SW(L; g_1, \mu_1) = SW(L; g_2, \mu_2)$ が導かれる。まず考える 2 は $t=1$ のとき、 $t=1, 2$ のときは可約解が現れるが、 $t=1$ のとき、ある $t \in [1, 2)$ に対し、 $(SW)_\mu$ が (g_t, μ_t) による可約解をもつかどうかである。 $b_2^+ \geq 2$ であれば、 $\{(g_t, \mu_t) | 1 \leq t \leq 2\} \in (g_1, \mu_1)$ と (g_2, μ_2) をつなぐ道として一般の位置にあるとすると、全ての $t \in [1, 2]$ について可約解もつた良き事判る。 $b_2^+ = 1$ であるとき、

$$\int_M (c_1(L) - 2\pi\sqrt{-1}\mu_t) \wedge \omega_{g_t} = 0 \quad (\text{但 } \omega_{g_t} \text{ は } g_t \text{ による自己双対調和 2 形式})$$

となる (g_t, μ_t) は、可約解をもつ。

さて、可約解が現れないとすれば、 M が多様体となるかどうかという問題については、横断正則性定理の Fredholm 写像版 (これも Simale による) を用いて、肯定的に答えられる。(即ち、 $\{(g_t, \mu_t)\}$ は道として一般の位置にあるようにとる。)

以上より $b_2^+ \geq 2$ の時は、 (g, μ) のとり方によらず、 $SW(L; g, \mu)$ を単に $SW(L)$ と書き、 $Spin^c$ 構造 L に関する Seiberg-Witten 不変量と

呼ぶ。 $b_2^+ = 1$ の時は (g, μ) の。

$$\int_M (c_1(L) - 2\pi\sqrt{-1}\mu) \wedge \omega_g = 0$$

で定まる“壁”のどちら側にあるかにより、 $SW(d; g, \mu)$ は別々の値をとり得る。この値の差を記述するものが wall-crossing 公式と呼ばれるものである。 $b_1 = 0$ の時は、Kronheimer-Mrowka の論文にある様に、値の差は ± 1 である。 $b_1 \neq 0$ の時は、 $b_1 = 0$ の議論を {平坦 $U(1)$ -接続} / \mathcal{G} のパラメトリスされた族について行うとよい。以下簡単を為 $b_2^+ \geq 2$ とする。

$spin^c$ 構造 L の (少し雑な data としての $c_1(L)$ の) Seiberg-Witten 類があるとは、 $SW(L) \neq 0$ とする事と定義する。Witten によると、Seiberg-Witten 類と、Donaldson 理論との Kronheimer-Mrowka の基本数とが対応していることが予想されている。また、Seiberg-Witten 類 L で $d_L > 0$ なるものは知られているものがある。(Seiberg-Witten 類 L は $d_L = 0$ を満たすものという問題もあり、示されている多様体のクラスは $1, 2$ 。symplectic 時は Kähler 4-多様体がある。ここでは $b_2^+ \geq 2$ としている事を改めて書く。))

§3. Kähler 曲面の場合.

複素構造に付随した“標準的” $spin^c$ -構造と思える事は、それは

$$S_{can}^+ \cong \Lambda^{0,0}(M) \oplus \Lambda^{0,2}(M), \quad S_{can}^- \cong \Lambda^{0,1}(M)$$

となるものである。一般の $spin^c$ -構造 L に付随しては、複素直線束 E が対応し、

$$S_L^+ \cong \Lambda^{0,0}(M) \oplus E \oplus \Lambda^{0,2}(M) \oplus E, \quad S_L^- \cong \Lambda^{0,1}(M) \oplus E$$

となる。

$\phi \in \Gamma(S_L^+)$ は $\varphi_0 \in \Lambda^{0,0}(M) \oplus E$, $\varphi_2 \in \Lambda^{0,2}(M) \oplus E$ の対として表される。また、上の S_L^+ の分解により

$$\sigma(\phi, \phi) = \begin{bmatrix} \frac{1}{2}(|\varphi_0|^2 - |\varphi_2|^2) & \varphi_0 \varphi_2^* \\ \varphi_0^* \varphi_2 & -\frac{1}{2}(|\varphi_0|^2 - |\varphi_2|^2) \end{bmatrix}$$

となる。今の場合、 $L \cong K_M^{-1} \otimes E^2$ となる。 K_M^{-1} は Levi-Civita 接続から決まる接続 A_0 による C^{∞} L の接続 A の代りに E の接続 E と同じである事が判る。 $\sigma = \sigma_0$ から、 (SW) は

$$\begin{cases} \bar{\partial}_A \varphi_0 + \bar{\partial}_A^* \varphi_2 = 0 & \textcircled{1} \\ 2F_A^{0,2} = \varphi_0^* \varphi_2 & \textcircled{2} \\ -i \langle F_{A_0} + 2F_A, \omega \rangle = \frac{1}{2} (|\varphi_0|^2 - |\varphi_2|^2) & \textcircled{3} \end{cases}$$

と成る。(但、 A は E の接続で、 $\bar{\partial}_A$ は共変微分の $(0,1)$ -part.)

① は $\bar{\partial}_A$ が施すと、 $\bar{\partial}_A^2 = F_A^{0,2}$ と成る事から、

$$F_A^{0,2} \varphi_0 + \bar{\partial}_A \bar{\partial}_A^* \varphi_2 = 0$$

を得る。∴ ② を代入し、左辺に φ_2 との L^2 -内積をとると

$$\int_M |\varphi_0|^2 |\varphi_2|^2 + |\bar{\partial}_A^* \varphi_2|^2 = 0$$

と成る。

よって、 $\varphi_0 \varphi_2 = 0$, $\bar{\partial}_A^* \varphi_2 = 0$ を得る。前者と②から $F_A^{0,2} = 0$ と成る。接続 A は L に正則構造を与え、 $\bar{\partial}_A^* \varphi_2 = 0$ を得たのと同様、 $\bar{\partial}_A \varphi_0 = 0$ も得られる。

まとめると、 A は E に正則線束の構造を与え、これは \mathcal{E}_A と書くと、 $\varphi_0 \in H^0(\mathcal{E}_A)$, $\varphi_2 \in H^2(\mathcal{E}_A)$ と成る。 $-\bar{\partial}_A \varphi_0 \varphi_2 = 0$ であるので、“一致の定理”と合せて $\varphi_0 \equiv 0$ 又は $\varphi_2 \equiv 0$ と成る事が判る。∴ ③ の両辺を M 上で積分すると、

$$\int_M c_1(K_M^{-1} \otimes E^2) \wedge \omega = -\frac{1}{4\pi} \int (|\varphi_0|^2 - |\varphi_2|^2) \omega \wedge \omega$$

と成ることは、 $\lambda \in \mathbb{R}$ かつ

$$\textcircled{\#} \begin{cases} \int_M c_1(K_M^{-1} \otimes E^2) \wedge \omega < 0 & \Rightarrow \varphi_2 \equiv 0 \\ \int_M c_1(K_M^{-1} \otimes E^2) \wedge \omega = 0 & \Rightarrow \varphi_0 \equiv 0, \varphi_2 \equiv 0 \\ \int_M c_1(K_M^{-1} \otimes E^2) \wedge \omega > 0 & \Rightarrow \varphi_0 \equiv 0 \end{cases}$$

と成る事が判る。即ち (SW) の解であれば、 $\int_M c_1(K_M^{-1} \otimes E^2) \wedge \omega$ の符号によつて、 E 上の正則構造 \mathcal{E}_A 上 $H^0(\mathcal{E}_A)$ の元 ϕ 又は $H^2(\mathcal{E}_A)$ の元の対が得られる。この逆はどうだろうか。

$\int_M c_1(K_M^{-1} \otimes E^2) \wedge \omega < 0$ の時を考へる。 $\varphi_0 \in H^0(\mathcal{E}_A)$ とする。ここで、前出の \mathcal{G} の“複素化”を考へ、この作用 $\tau(A, \varphi_0)$ を眺めてみる。特に $f: M \rightarrow \mathbb{C}$ に対し、 $\exp(f): M \rightarrow \mathbb{C}^*$

と考へ、これの (A, φ_0) についての作用は

$$(A, \varphi_0) \xrightarrow{e^f} (A + \partial f - \bar{\partial} f, e^f \cdot \varphi_0)$$

である。これより、 $F_{e^f(A)} = F_A - 2\partial\bar{\partial}f$ であり、方程式③は

$$-\sqrt{-1}\Delta f + (2\langle F_A, \omega \rangle + \langle F_{A_0}, \omega \rangle) = \frac{\sqrt{-1}}{2} e^{2f} |\varphi_0|^2$$

と書かれる。これは、曲面上の Gauss 曲率と $|\varphi_0|^2$ の様な関数が現れ得るかという問題に Kazdan-Warner が扱ったときの方程式の形と似ている。

定理 $\Delta f - k = -e^{2f} h$ は、 $h \geq 0, \neq 0, \int_M h > 0$ の条件下では解 f を持ち、また一意である。

この定理を使うためには、 h, k についての条件を調べる必要があるが、前者は $\varphi_0 \neq 0$ にとると満たされ、後者は

$\int_M c_1(K^{-1} \otimes E^2) \wedge \omega < 0$ なる仮定より満たされる。従って、 E 上の正則構造 Σ_A と $\varphi_0 \in H^0(E_A)$ ($\varphi_0 \neq 0$) に対応し、(SW) の解が構成された。

従って、 M 上の Kähler 計量 g に対応し、

$\int_M c_1(K^{-1} \otimes E^2) \wedge \omega < 0$ の時、

$$M(L, g) \xrightarrow{\cong} \{c_1(E) \text{ の Poincaré 双対を實現する effective divisor}\}$$

同様、

$\int_M c_1(K^{-1} \otimes E^2) \wedge \omega > 0$ の時、

$$M(L, g) \xrightarrow{\cong} \{c_1(K) - c_1(E) \text{ の Poincaré 双対を實現する effective divisor}\}$$

となる。

さて、上の g は、一般の位置にあるとはいえない。即ち 2 度書いた様な議論が、 $M(L, g)$ に対応してそのまま使える訳ではない。そこで、 $M(L, g)$ 上に "obstruction bundle" を作り、この切断の零点集合をみる事で、Seiberg-Witten 不変量の計算をする。(論文という形で書かれているかどうか知らないが、以下の議論は、

Kronheimer-Mrowka に依るものと思う。)

上で見た 1 対 1 対応は、単に集合としてのものであったが、更に "適切な" 接空間まで込めた同一視であることが示される。

方程式 (SW) を, Banach 束の切断と見る事から始める.

$$\begin{aligned} \mathcal{V} &:= [(\Gamma(S^+) \setminus \{0\}) \times \mathcal{A}(L) \times \{\Gamma(\text{Hermend}^0(S^+)) \oplus \Gamma(S^-)\}] / \mathcal{G} \\ &\downarrow \\ \mathcal{C} &:= [(\Gamma(S^+) \setminus \{0\}) \times \mathcal{A}(L)] / \mathcal{G} \end{aligned}$$

ここで, $\text{Hermend}^0(S^+)$ は, S^+ の各 fibre での traceless hermitian endomorphism 全体の成す M 上の vector 束を表す. (SW) は \mathcal{V} 上の $\mathcal{V} \rightarrow \mathcal{C}$ の Fredholm cross section とみる事ができる. \mathcal{C} 上の section s が zero section に横断的であれば, $\mathcal{M} = \text{Zero}(s)$ は多様体となり次元も $d_{\mathcal{C}}$ に一致する訳だが, 一般に横断性は満たされずには限らない. その時は, 摂動項 $\mathcal{C} \rightarrow \mathcal{V}$ を加えて, zero section と横断的にする事ができる. 例として, section s の線型化 ds が全射である. $\text{Coker}(ds)$ が $\text{Zero}(s)$ 上一定次元で, 有限次元 vector 束となる場合を考えよう. このとき, \mathcal{V} の $\text{Zero}(s)$ 上への制限と

$$\mathcal{V}|_{\text{Zero}(s)} = \text{Coker}(ds) \oplus \mathcal{W}$$

と vector 束として分解する. 摂動項は, $\mathcal{C} \rightarrow \text{Coker}(ds)$ と取ることになり得る.

命題 $\text{Coker}(ds) \rightarrow \text{Zero}(s)$ の, 一般の位置にある section の零点集合は, (SW) の摂動した方程式の解空間と cobordant である. また, これを用いて, Seiberg-Witten 不変量は計算される.

そこで, $\text{Coker}(ds) \rightarrow \text{Zero}(s)$ の Euler 類を知る必要がある. 実は, 次の完全系列がある. $(E_A, (\varphi_0, 0)) \in \mathcal{M}$

$$\begin{aligned} 0 &\rightarrow H^0(M, \mathcal{O}) \xrightarrow{\varphi_0} H^0(M, E_A) \rightarrow \text{Ker } ds \\ (H) \quad &\rightarrow H^1(M, \mathcal{O}) \xrightarrow{\varphi_0} H^1(M, E_A) \rightarrow \text{Coker } ds \\ &\rightarrow H^2(M, \mathcal{O}) \xrightarrow{\varphi_0} H^2(M, E_A) \rightarrow 0 \end{aligned}$$

これと, $0 \rightarrow \mathcal{O} \xrightarrow{\varphi_0} E_A \rightarrow E_A|_{\varphi_0^{-1}(0)} \rightarrow 0$ の厳密完全系列との間には (準)同型がある. $\text{Ker } ds, \text{Coker } ds$ はそれぞれ $H^0(D, \nu_D), H^1(D, \nu_D)$ ($D = \varphi_0^{-1}(0), \nu_D = D$ の "normal bundle") と同型となる. (上の完全系列を示すには, 楕円型線型微分方程式を解くというた

解折的議論の概要となる。詳細は省略する) t_1 と t_2 の $b_1(M) = 0$ とすると $H^1(M, \mathcal{O}) = 0$ であり、また複素直線束 E 上の正則構造は、 \mathbb{P}^1 -変換を除いて一意の $\mathcal{O}(1)$ である。 $\mathcal{M} = \text{Zero}(s)$ は $H^0(M, E)$ の射影化 $\mathbb{P}(H^0(M, E))$ となる。 (b) は \mathcal{M} の各点毎に成り立ち、 \mathcal{M} 上の vector 束の完全系列を得る。 $\mathbb{P}(H^0(M, E))$ 上の超平面切断束 \mathcal{H} とすると、

$$0 \rightarrow H \otimes H^1(M, E) \rightarrow \text{Coker}(ds) \rightarrow \underbrace{H^2(M, \mathcal{O})}_{\text{自明束}} \rightarrow H \otimes H^2(M, E) \rightarrow 0$$

となるので、 $\text{Coker}(ds)$ の Chern 類は $(1 + c_1(H))^{h_0(E) - h_2(E)}$ で与えられる。 $\therefore r_j(E) = \dim H^j(M, E)$.

また、 $\dim \mathbb{P}(H^0(M, E)) = 2(h_0(E) - 1)$ である。このことから次を得る。

命題: \mathcal{L} は M 上の spin^c 構造で、 $d_{\mathcal{L}} = 0$ となるものとする。

$$\begin{cases} SW(\mathcal{L}) = 0 & (h_0(E) = 0 \text{ 又は } h_0(E) - 1 > h_1(E) - h_2(E) \geq 0) \\ SW(\mathcal{L}) = (-1)^{h_0(E)-1} \begin{pmatrix} \chi(E) - 2 \\ h_0(E) - 1 \end{pmatrix} & (h_1(E) - h_2(E) < 0 \text{ の時}) \\ SW(\mathcal{L}) = \begin{pmatrix} h_1(E) - h_2(E) \\ h_0(E) - 1 \end{pmatrix} & (h_1(E) - h_2(E) \geq h_0(E) - 1 \geq 0 \text{ の時}) \end{cases}$$

例 $\mathbb{C}P^2$ の 9 点 blow-up を $\mathbb{C}P^1$ 上の elliptic surface とみる。この $m+1$ 個の copy の fibre に沿う和を $V(m)$ と書く。一般 fibre を F と書き、 $E = \mathcal{O}(F)$ なる複素直線束とし、 \mathcal{L} を $S_{\mathcal{L}}^{\pm} \cong S_{\text{can}}^{\pm} \otimes E$ なる spin^c 構造とする。 ($p_g(V(m)) = m$ であり、 $p_g \geq 1$ の時を考へる。)

$$\text{すると } SW(\mathcal{L}) = \begin{cases} (-1)^g \binom{p_g - 1}{g} & 0 \leq g \leq p_g - 1 \\ 0 & g : \text{以上} \end{cases}$$

3.10-2 節の (#) に戻す。 \mathcal{L} は Seiberg-Witten 類となる。

$\deg_{\omega} L = \int_M c_1(L) \wedge \omega$ で決めると、 $L = K^{-1} \otimes E^2$ であるから、 $\deg_{\omega} L < 0$ であれば、 E が零でない正則切断を持つことから、 $\deg_{\omega} E \geq 0$ 従って $\deg_{\omega} K + \deg_{\omega} L \geq 0$ となる。同様: $\deg_{\omega} L > 0$ であれば $\deg_{\omega} K - \deg_{\omega} L \geq 0$ となる。これらの事から、

Seiberg-Witten 類 L に 同値する S^1 束 L は, $(b_2^+ \geq 2 \text{ と } |c_1(L)| =)$

$$0 \leq |\deg_{\omega} L| \leq \deg_{\omega} K$$

を満たす事が判る。又右の等号成立の時は, $L = K^{\pm 1}$ である事も判る。

以上の事を踏まえて, Kähler 曲面に対して判る事を述べよう。

$b_2^+ \geq 2$ (実際 $b_2^+ = 2p_g + 1$ なるので, $p_g \geq 1$ 従って $b_2^+ \geq 3$) としよう。

① $L = K^{\pm 1}$ なる spin^c 構造 σ : Seiberg-Witten 類 L と同じ θ の (即ち標準的 spin^c 構造 L_{can} (このとき $L = K^{-1}$) 及び $L_{\text{can}} \otimes K$ (このとき $L = K$)) があり, Seiberg-Witten 不変量は ± 1 。

② 単に「 $K^{\pm 1}$ が Seiberg-Witten 類である」と言われることもあるが, $H^2(M; \mathbb{Z})$ に 2-torsion があるとき, L は spin^c 構造が決まらぬ事に注意。

③ M が一般型極小曲面であれば, Seiberg-Witten 類は上の 2つに限る。

(説明) L が Seiberg-Witten 類であるとすると, まず $d_L > 0$ とならなければならない。即ち, $c_1(L)^2 \geq c_1(K)^2$, (4)

この頁の一番上にある様に, $0 \leq |\deg_{\omega} L| \leq \deg_{\omega} K$ である。今, 仮定から, $c_1(K)$ は, Kähler cone の閉包に属するから,

$$|c_1(L) \cdot c_1(K)| \leq c_1(K)^2$$

を得る。(4) と Hodge index theorem と合せて, $c_1(K)^2 = \pm c_1(L)^2$ となるが, このとき $c_1(K) = \pm c_1(L)$ とならなければならない。

④ M が極小楕円曲面 Σ のとき, $K^{\pm 1}$ は, Seiberg-Witten 類の中で, $|\deg_{\omega} L|$ が最大となるものから, 他の Seiberg-Witten 類は, $K^{\pm 1}$ の有理数 $\in [-1, 1]$ 倍と書かれる。

(説明) $p_g \geq 1$ なるので, 正則 2 形式 η ($\neq 0$) が存在する。 η は, 自己双対 2 形式 η であり, これは Seiberg-Witten 方程式の擾動項として用いる事ができる。本節での Kähler 曲面上での Seiberg-Witten 方程式についての考察を $2F_A^{0,2} = \varphi_0^+ \varphi_2$ の代りに

$$2F_A^{0,2} = \varphi_0^+ \varphi_2 + \overline{\eta} \quad \text{--- ③'}$$

に置き換えて実行すると.

$$\bar{\partial}_A \varphi_0 = 0, \quad \bar{\partial}_A^* \varphi_2 = 0, \quad F_A^{\circ 2} = 0$$

よって $\bar{\eta} = \varphi_0^* \varphi_2$ なる事が判る. つまり $\eta = \varphi_0 \varphi_2^*$ と $\varphi_0 \in \Gamma(\mathcal{E})$, $\varphi_2^* \in \Gamma(\mathcal{E}^{-1} \otimes K)$ の積に η が書かれた. $\eta \neq 0$ なるので φ_0 の因子, φ_2^* の因子は標準因子が分解する事が判る. 極小楕円曲面の標準因子は、ファイバーの和の形をしてゐることから、その一部は定まる直線束 \mathcal{E} は K の有理数倍である事が判る. このことと $0 \leq |\deg \omega_L| \leq \deg \omega_K$ とを合せて ③ の主張を得る. (この計算は Witten の振動による)

④ 極小曲面でない時は、(-1)-curve(s) を含む. (-1)-curves をつなぐ写像を $\pi: M \rightarrow M'$ とし、 M' は極小曲面であるとしよう. E_1, \dots, E_k を (-1)-curves とすると.

「 M の Seiberg-Witten 類 = M' の Seiberg-Witten 類 $\pm [E_1] \pm \dots \pm [E_k]$ 」となる. この事は、Kähler 曲面でない時も、"blow-up formula" として知られている.

こうした事から、 $K^{\pm 1}$ (の位相型) は、Kähler 曲面の C^∞ 構造で定まる事が判る. (大雑把には、極小曲面について). $K^{\pm 1}$ は "一番大きな" Seiberg-Witten 類と言えり. よく知られている様に、 P_g, χ は、位相構造のみで決まってしまう.

一般型極小曲面では、 $P_n(M) = \frac{n(n-1)}{2} K_M^2 + \chi(\mathcal{O}_M)$ ($n \geq 2$) なるので、多重種数が C^∞ 構造のみから読みとれる事が判る. 楕円曲面では、特異ファイバーから多重種数が決まるが、Seiberg-Witten 類から特異ファイバーが決定できる事からこの場合も、結局 C^∞ 構造から多重種数が決まる事となる. 残る $K3$ 曲面, Enriques 曲面, トーラス, は、位相から正別がつく. (超楕円曲面, 射影平面, 楕円曲面は $b_2^+ = 1$ 即ち $P_g = 0$ の場合なので、別の扱いをする) $b_2^+ = 1$ の時は、Seiberg-Witten 類は metric に依ると前に述べた. 従って、扱いが異なる. 此れについては省略する. [F-M] を参照されたい.

まとめると、多重種数従って小平次元が C^∞ 不変量である事が判る.

§4. 4次元トポロジーへの応用について.

4次元トポロジーについてもどんな応用があるのか簡単に触れる。昨年、今頃 Seiberg-Witten 理論の第一報を聞いた時、(SW) は "magic equation" で、これによりゲージ理論は簡単になったとのことであつた。例えば、Donaldson に始まる $SU(2)$ instanton の理論では、"bubbling off" という現象があり、compact 性が崩れる様子を調べる事が必要であつた。(SW) では、§2 で述べた様に、compact 性が保障されている。また構造群がアベル群である事も扱ふと容易に出来る。閉有向4多様体の交叉型式が定値であれば、それは標準的なものに限るといふ Donaldson の定理に始まる一連の定理の別証が容易に得られると噂であつた。(純粋に二次型式の問題が残つていた様だがこれも Elkies により示されたこと) 数学者の論文として [K-M] が最初のものであるかと思う。ここで Kronheimer-Mrowka は $\mathbb{C}P^2$ の二次元ホモロジー類を与えた時、これを實現する埋込まれた曲面の種数の下限についての Thom の予想を解決した。(実際、この問題が奇襲となり、2人は、一連の仕事を進めた。そしてその Witten による解釈を経て、Seiberg-Witten へとつながる。) その後何人かの人々が $\mathbb{C}P^2$ 以外の4多様体での Thom 予想の一般化を扱つた。

閉スピノ4多様体では $b_2/|Sig| \geq 11/8$ とするかどうかという予想がある ($11/8$ -予想: 大3曲面のとき等号成立)。古田幹雄氏は、Seiberg-Witten 方程式を用いて少し弱く不等式を示した。(詳しくは論文 [F] 又は古田氏に直接聞かれたい。) これは、今まで見てきた様に解空間を調べるのではなく、方程式そのもの(の有限次元近似)を見るという新しい視点が示されている。

最後に、シンプレクティック4多様体の Seiberg-Witten 理論について少し述べる。 $SU(2)$ -instanton の理論は、Kähler 曲面上では、安定ベクトル束の moduli の話と結びつき、不変量の計算も行われ、トポロジー的応用もあつたが、symplectic 4多様体については、筆者の知る限り具体的応用はなかつた様にある。今回の

Seiberg-Witten の場合は, Taubes により, Kähler の場合には類似した結果がいくつか得られている。(たとえば $K^{\pm 1}$ は Seiberg-Witten 類である。) その中でも著し... のは Seiberg-Witten 類に對し, symplectic に埋込まれた曲面が存在するという定理がある。これを基に 4次元の symplectic topology の進展があるが, については省略する。

非専門家による紹介文であり, 内容は偏り, 不完全な説明等があると思うが, お許し戴きたい。

参考文献

- [F-M] R. Friedman - J. W. Morgan, Algebraic surfaces and Seiberg-Witten invariants, preprint
- [F] M. Furuta, Monopole equation and $11/8$ conjecture, preprint
- [K-M] P. Kronheimer - T. Mrowka, The genus of embedded surfaces in the projective plane, Math. Res. Letters 1 (1994), 797-808
- [T1] C. H. Taubes, The Seiberg-Witten invariants and symplectic forms, Math. Res. Letters 1 (1994), 809-822
- [T2] ———, More constraints on symplectic forms from Seiberg-Witten equations, Math. Res. Letters 2 (1995) 9-14
- [T3] ———, The Seiberg-Witten and the Gromov invariants, Math. Res. Letters 2 (1995) 221-238
- [W] E. Witten, Monopoles and four-manifolds, Math. Res. Letters 1 (1994) 769-796